

俳句

早春の一夕、久しぶりに出合った古い友人と酒を酌み交わしながら、歓談に時の移るのを忘れた。青春期を共にした者同志の間には、平素は疎遠がちでも、逢えばどんな話題でも無媒介に通じあうというところがある。どうかすると、独りよがりの蛸壺と一緒に落ち込む危険性は十分あるのだが、やはり楽しいひと時が恵まれたという感が深い。

その友人が、何かのきっかけで、『文芸春秋』二月号の随筆欄に、映画監督の新藤兼人氏が、「黒バックに立つ人間たち」という題で書いている文章の話をした。それは、一昨年十二月、新藤氏がシナリオハンティングのため、カナダのロッキーマウンテンの麓に散在する旧日本人強制収容所を訪れた時のことを書いたものという。私はその話について釣り込まれて、熱心に相槌を打っていたらしい。尾道に住む彼は、帰るとすぐその文章をゼロックスにかけて送ってくれた。

新藤氏が、バックバーをレンタカーで発って、三日目に着いたグリーンウッドは、「灰色の空の下に一筋の町が埋もれていた」と描かれているような、ひっそりとしてだれも通らない、ゴ

ストタウンであった。かつてはここに鉱山が試掘され、千人もの労働者がひしめいていたことがあるが、まもなく放棄されて無人の町となった。そのあとが、第二次大戦時カナダ政府による日本人の強制収容所となったのだという。

だれひとり通らない町すじに、一軒のコーヒーショップがあった。新藤氏一行は、屋敷をしたためるためにその中に入っていた。西部劇で見えるようなカウンターの、天井の高いがらんとした店であった。食べものはないというので、水っぽい、おまけにぬるいコーヒーを飲んでみると、ふと、曇った窓ガラスを通して、「黒い防寒服に身をかためた二人の人間が道路の向こう側を通って」いるのが見えた。頭巾で顔は見えないが、新藤氏は、その二人が「たしかに日本人」であると直観したそうである。たまらなくなるとび出し、凍った道を足下に注意をはらいながらゆく二人の前に立ち塞がり、「あなた方は日本人でしょう」というと、二人の目がまじまじと新藤氏をみつめ、突然興奮した声でしゃべり出した。「私は日本人です」といって、初めに口を開いたのは、八十七になるという男の老人であった。たてつづけにしゃべる男を遮るようにして、少女のように弾んだ声で、「私はこの人の妻です」と語り出したのは、八十一になるといふ老女であった。二人は、カナダ政府に強制収容されてそこへ連れてこられたが、戦争が終って日本人はみんなちりぢりになったのに、二人だけはここに残っているのだという。二人は口をそろえて、ちよつとも寂しくはない、自分たちはここへ墓をこしらえたのだ、という。「墓をこしらえ

たんですから、ここはもう故郷ですよ」と付け加えたのは老女のほうであった。

新藤氏は、この二人からうけた印象を次のように総括する。

だれも通らない凍った町を、たった二人で歩いている日本人は、黒バックの前に置かれたように鮮明であった。夫婦という概念をこえて、人と人とが結びついている人間の姿だった。一人では生きられないかもしれないが、二人ならやっと生きられるという男と女だった。もはやそれは孤独などということばではいいあらわせるものではなかった。

新藤氏のこの結論に、私はもちろん共鳴するが、とくに私の心をひいたのは、老女のいった、「墓をこしらえたんですから、ここはもう故郷ですよ」ということばの意味するものである。自分たちの骨を埋めるべくあらかじめ用意した「墓」が、そのまま「故郷」の現証であるという考え方は、二人の生まれ育った日本の土俗として古くから養われてきた通念にもとづくものである。老女が「故郷」というとき、そのことばの背後には、本来の故郷の土と森と空のイメージが、鮮やかに浮んでいたにちがいない。このイメージに支えられて、異国に新たにできた「故郷」が、安住の地となりえたのではないか。そうでなければ、日本人である新藤氏との思いがけない対面に興奮して、「寂しくはない」ということばを繰り返しながらしゃべりまくるはずがないからである。

併

しかし、新藤氏の文章から、私自身の問題として引き出してきたことは、そればかりではない。実はもう一つあるのである。それは、新藤氏一行がさらに奥地へとハンティングしながらはいついて、ニューデンバーという、やはり日本人強制収容所のとを訪ねたときのことであった。そこには、七十九という老女がひとりで住んでいた。夫を失って三年になるというその老女が、こんなことをいったそうである。

もうろくするのが怖くて、俳句をやっているんです。なにか頭をはたらかせていけば、少しは助けになるかもしれませんから。

このことばを紹介したあとに、新藤氏は、「だれにみせるでもなく、ぼけないための俳句をやらずける老女は、これまた黒バックの前の人間の姿だった」と付け加えて、この文章を結んでいる。「数えるほどの人間がひっそりと」住んでいる奥地で、ひとり住まいをする老女にとって、筆を執ることが怖いという気持ちはよくわかる。それを少しでも防ぐために頭をはたらかせるというのなら、ほかにも方法があるかもしれない。しかし老女は、「俳句」を作っているという。おそらく、夫の死後、なにかのおりに、ごくあたりまえのことのように作りはじめたのではないかという気がする。

ここにいう「俳句」は、近代人のいう文学などという次元のものではあるまい。それは同じく

十七音の形式はふんでいるが、文学以前の、いわば日本民族の心のおのずからの表象としての、もっとも普遍的な形式による、日本語表現の一体とでも呼んだらよからうか。

異郷で独りぐらしをしているこの老女は、そのような「俳句」のリズムに、まだ忘れないでいる日本語をのせることによって、「俳句」の生まれた祖国の風土に心をつなぎ、そのようなはかないとなみを唯一の力として生きつづけているのであろう。それは、堪えられない孤独の中で、一途な郷愁から作りはじめられたものかもしれないが、すでに老女の生理にまで強い作用を及ぼしていることがわかる。

私は本誌前号に、インドのナールランダで、落日と満月を交互に眺めながら、途中のバスの窓から見た黄色い菜の花を取り合わせて、ごく自然な連想で、蕪村の「菜の花や」の句を思い出したことを書いた。今私は、「俳句」にかかわる、インドの荒野でのこのような経験と、七十九歳の老女のカナダの奥地での経験とを結ぶ原理は何であるかを考えつづけている。結論はすでにおぼろげながら見えているような気もするが、もう少し深く掘り下げてゆきたい衝動にかられている。

俳句
そのように思考をすすめてゆくと、その進路は、必然的に、文学・非文学の論の領域を越えて、日本の風土と日本人の心との相関の問題、つまりは日本文化の伝統の問題に入ってゆくしかないであろう。その過程において、「俳句」における月並の問題、さらには「和歌」における類型の問題も、新たな意味をもって浮び上がってくるにちがいないと思っている。(五一・四)